

付編 1 八千穂高原の歴史

井出 正義

八千穂高原は八郡山と呼ばれ、茶臼山（標高2,384m）など北八ヶ岳の東斜面に位置していて、大石峠（標高2,185m）を介して、西方山麓の諏訪郡芹ヶ沢（現茅野市）と古くから交流が行われていた。江戸時代には、大石村を枝郷とする八郡村に所属し、八ヶ岳山、八郡山などの名でよばれ、取出、宿岩、高野町、大窪、下畑、中畑、上畑、八郡の八ヶ村の入会山で、山元の八郡村が山年貢を取りまとめて納入し、八郡と大石から一名ずつ山守が命ぜられてその管理にあたっていた。

現国道299号線の麦草峠や大石川源流付近は黒曜石の埋蔵地で、原始時代には茅野市側の冷山やさらに遠く和田峠付近に産する黒曜石も、この八千穂高原を通して佐久地方や関東方面に運ばれていたことは、池の平遺跡をはじめ、各地の先土器・縄文時代遺跡の発掘調査によって明らかにされている。

八千穂高原の入り口に位置する大石の蓬間遺跡では1981（昭和56）年に、灰釉陶器高台付皿2、土師高台付内面黒色椀2 その他破片と共に、管状紡錘形土錘70個を出土した。管状土錘は漁網用の錘りであるが、従来千曲川流域にはその出土数が比較的少なかった。しかもこの灰釉陶器は10世紀後半に東濃地方で焼かれたものと考えられるから、平安時代後期にこの大石川で網を用いた漁法が行われていたことを示す。大石川は北八ヶ岳の白駒池や雨池に源を発し、良質で豊富な水量をもち、現在佐久平上水道の最も有力な水源であり、マスなどの養殖漁業も行われている。蓬間遺跡は白駒の池を水源とする大石川と、雨池を水源とする八柱川の合流点にある。ここをさかのぼれば大石峠を越えて、諏訪郡山浦地方に通ずる古来の交通路であって、土錘を多く出土する諏訪湖周辺の古代遺跡との関係の深さが考えられ、千曲川上流域の漁業と古代集落のあり方を考える上に極めて重要である。

八千穂高原の所在する八千穂村の千曲川西岸地区が記録の上に初めて見られるのは、建武2年（1335年）10月21日、山城国大徳寺領・信濃国佐久郡伴野庄の雑掌、水沼実真が、同庄各郷村の年貢員数大徳寺に報告した注進状（「伴野庄年貢注文案」大徳寺文書）で、「畑物村百貫文（中略）大石・八郡ハ案内を知らず」とある。畑物村は近世には、下畑、中畑、上畑、大窪の四ヶ村に分かれ、現在八千穂村の大字畑となっている地域である。大石、八郡の両村の村高はその時点ではまだ、大徳寺が寺領支配のため派遣した雑掌（役人）には、正確に把握されていなかったのであろう。

上畑の勝見沢は、八郡部落の北方約1 km、石堂川北岸の台地上にあるが、昭和15年ごろ、開田中に石囲い炉址から、土師器の破片と共に瑞花鳳凰紋八稜鏡が出土している。直径約10cmで、紋様は摩滅がすすんでいるが、先年茅野市阿弥陀堂構井遺跡から出土した3面の八稜鏡に類似性が

見られ、平安末期に諏訪地方との交流を示す一資料と考えられる。上畑の熊野宮は樹齢1,000年以上と推定される神代杉があるが、ここに鎌倉時代の板碑が3面保存されている。徳治2年(1307)の刻銘があり、南佐久郡下最古の板碑である。板碑は青石塔婆とよばれ、秩父産の緑泥片岩を素材としているから、十石峠や榑峠を越えて秩父から運ばれてきたもので、中世における関東と佐久地方との交流を示す貴重な資料である。

中世の城館跡は馬越の馬越城跡、八郡の通城跡、佐口の佐口城跡など、土豪(地侍)の居館跡が、八千穂高原の裾野の台地上にある。また、千曲川畔の低地に接する段丘崖上には、大石川烽火台、権現山砦、下畑城、下畑下の城などの山城跡が、佐久甲州往還(国道141号線)ぞいにならんでいて、戦国時代甲斐武田氏の佐久地方侵攻に関連した伝承を残している。

江戸時代になると、街道の整備が行われ、小諸城主仙石秀久は慶長10年(1605)、佐久郡諸村に人夫を割り当てて、佐久甲州道の道普請を行った。中山道岩村田宿から、甲州街道韭崎宿を結ぶ佐久甲州道は、脇往還として宿場が置かれ、問屋と伝馬が常備され荷物の継立を行った。上畑宿もその一つで、大石川畔には一里塚も設けられ、現在も一里塚の地名と榎の大きさがその名残をとどめている。八郡村大石と諏訪郡芹ヶ沢の間では、両村住民が大石峠を越えて互いに産物を交易していたが、宝暦6年(1756)、大雪で八ヶ岳山の木が倒れて、馬の通行ができなくなってしまった。30年後の天明6年(1786)11月に下畑村の医師小宮山桃原がこれを復旧した。佐久郡大石名主与惣兵衛と諏訪郡芹ヶ沢村名主市五郎は連名で、小宮山桃原に感謝の意味をこめて、次のような取替書を差し出している。その大要は「今後は、幕府の公定賃銭の二割増(許容範囲)として、本馬一匹460文、軽尻一匹274文、人足一人208文と定めて、両村相互に仲むつましく荷物の継送りをして、決してこの規定に反することのないようにいたします」とある。このように幕府裁定の伝馬人足賃銭を定めて、大石、芹ヶ沢両村が継立をしいていたことは、両村が宿場と同様の機能を持っていたと理解することができる。

しかし中山道の宿場にとっては、大石峠道のような間道がこのような継送りの機能を持つことは許すことのできない行為であった。幕府・大名の公用荷物を無賃或いは安い公定賃銭で運ばなければならない宿場にとって、商人荷物だけが宿場の経営や生活を維持するための収入源である。それが間道を通ってしまえば、宿場の経営が破滅し、幕府の交通の大動脈も止まってしまうことになる。こうした矛盾が現実となって争われたのが、紀州藩の御用途米や水戸藩御用米の大石峠通過問題であった。幕末、外国船の来航、尊王攘夷論などが起き、海防、軍備拡大等で財政の窮乏した各藩は、用途米、御用米などの名目で、大量の米の買い付けをして、貸付米、払米などによって利益を上げようとした。

弘化元年(1844)、紀州藩は、伊那高遠藩領で大量に買い付けた米を「紀伊殿用途金貸付引当米」として、芹ヶ沢村から大石へ継立、高野町問屋を経て、余地峠越え、上州吉井貸付所に引き取り、倉賀野宿から船積みして江戸屋敷に廻米するという計画であった。この計画は中山道下諏訪から高崎まで17宿問屋の訴えによって、幕府勘定奉行の意をうけた中之条代官所によって、八郡村で

差留められ、訴訟の結果、芹ヶ沢へ継ぎ戻された。

安政2年(1855)、水戸藩が諏訪藩領で買い付けた米を、水戸藩御囲米として、芹ヶ沢村の紋右衛門らが運送を請け負って、大石峠越え、上州吉井経由、倉賀野河岸から江戸に廻米することになった。これに対しては、中山道各宿問屋の外、米を西上州に移出している佐久平の171ヶ村の農民が、死活の問題として幕府勘定奉行にその阻止を嘆願している。

このような歴史を秘めた八郡山（八千穂高原）は、前述のように、八郡村を山元とする八ヶ村の会合山で、山役永7貫300文余を上納して、各村の村高に応じた馬札をもって入山し、家材木、薪、馬草、刈敷を採取して、農業経営を支えてきたのであるが、明治8年(1875)、地租改正にあたり全山を国有地に編入されてしまった。その結果、入山を禁止された八郡区住民は事の重大さに驚いて、農商務省に対して明治33年(1900)、国有林野下戻の行政訴訟を提起し、同37年(1904)にはこれを畑八村に引きつぎ、13年後の大正2年(1913)に八郡山4,000町歩の下戻しに勝訴した。下戻し山林野のうち1,000町歩が成功報酬（1/3の約束）として弁護士に支払われ、それは現在個人企業の所有林となっている。残る3,000町歩の広大な山林野が、畑八村有に帰し、現在は八千穂高原として、大きな将来展望をもって開発されてきているのである。

八千穂高原を通して大石峠を越える道は、明治以後、鉄道の開通によってすっかり忘れ去られていたが、大正時代に製糸業を中心とする経済の発展に対応して、南佐久郡中南部と諏訪郡山浦地方を結び、諏訪湖畔に達する道の必要性が注目され、昭和7年(1932)11月、町村道茅野佐久線の建設が着工され、同10年県道に編入され、同16年まで工事が進められたが一時休止となった。戦後昭和27年(1952)から工事が再開され、同36年(1961)には主要地方道茅野佐久線となり、同41年(1966)に開通した。現在は埼玉県飯能市と茅野市を結ぶ国道299号線となり、麦草峠（標高2,120m）は日本国道の最高地点として知られ、付近の亜高山帯原始林の中に白駒池、雨池、双子池などが点在する高原山岳観光道路となっている。

現在八千穂高原は広大なカラマツの人工造林と、亜高山性針葉樹林帯を主とし、シラカバ、ミズナラ等落葉樹の美林の中に、レンゲツツジの群落がいろどる。しかし、かつての池の平牧場には馬や牛の姿はない。カラマツの美林は育ったが、用材としての販路は閉ざされている。八千穂高原は新しい観光開発を模索している。高原に点在する施設には、NHK外国電波受信所、佐久上水道水源と水源神社、八千穂高原別荘地、八千穂高原スキー場などがある。旧池の平牧場には自然園、駒出池付近のバンガロー、キャンプ場、フィールドアスレチック、八千穂レイク、自然休養林、八千穂日中青年の家、姉妹都市府中市民保養所「やちほ」等がある。